卒業論文

青年期知的障害者をめぐる親性のゆくえ

―ひきずられる親の思い―

2018 年度入学
九州大学　文学部　人文学科　人間科学コース
社会学・地域福祉社会学専門分野
1 LT18307S　石原圭介
2022 年 1 月提出

要約

本研究では「青年期知的障害者を抱える親」の語りから親の思いを探っていく。
第一章では本研究の目的を述べている。1996 年に優生保護法が廃止され、障害者を対象とした法体制も整えられてきた。近年では障害者の脱施設化という考え方も進み、地域で生きることを目指す機運も高まっている。ただ、こうした状況が障害者家族の実情に沿っているのかという点には議論の余地があり、障害者家族からの視点から社会をとらえることは欠かせない。そこで、知的障害者の親から見た現在の社会を探っていく。

第二章では先行研究をもとに、障害者家族の置かれている現状をまとめるとともに、これまでの時代の変化についても触れている。法の変遷や、家族研究の系譜などを追うと、状況が改善している点も多い。一方で「世間」の目や、入所施設ありきという状況に大きな変化が見られないという指摘もある。このように、様々な観点から障害者と社会について触れている。加えて、章末では先行研究に対する批判的な検討を行う。

第三章では今回の調査方法や対象者 6 名の情報を記載している。本研究では青年期知的障害者を 15 歳から 20 歳前後と設定し、その両親を対象に聞き取りを行う。高校卒業後は決められた居場所はなく、それぞれの子どもの特性や発達段階に応じた居場所を親自身が探していく。こうした状況を踏まえ、今回の対象年齢を設定した。半構造化の形式をとり、障害児が生まれた当時の話から現在の話、そして将来の話について聞き取りを行う。

第四章では今回インタビューに応じてくださった 6 名の方それぞれの語りをまとめている。過去のつらい経験や将来への不安なども語られており、障害者の親から見た社会がどのように映っているのかということを感じ取ることができる。また、6 名の方もそれぞれ障害に対する見方に共通点や異なる点があり、「障害者の親」という言葉でひとくくりにできない多様性がある。

第五章では第四章の語りを踏まえて、6 つの項目ごとに考察を行う。親が社会の厳しい現実にぶつかりながらも、その現実を受け入れて生きているという側面が映し出されている。語られる現実の中には世間とのギャップや虐待の不安などもあるが、親は厳しい現実から子どもを守るべく、他者を強く意識せざるをえない状況に置かれている。このような不安や子どもの自立度の低さによって、親性が長期にわたってひきずられている様子が垣間見える。

第六章ではこれまでの考察を踏まえて青年期知的障害者の親から見た社会がどのようなものか、そして親にとって必要なものは何かということを検討している。親は厳しい現実に傷つけられながらも親の会での交流などを通し、順応してきた。一方で、社会との溝は埋まっておらず、健常者と障害者という線引きがなされている。その背景には障害者家族の社会に対する不安があり、いかに障害者家族から信頼される社会福祉体制を整えるかが大きな課題として見えてきた。

キーワード：知的障害者、親性、他者

はじめに.....1
1　研究目的.....2
2　障害者家族の立ち位置.....3
2.1　先行研究.....3
2.1.1　障害の「個人モデル」から「社会モデル」へ.....3
2.1.2　法制度の変遷.....3
2.1.3　家族研究の系譜.....5
2.1.4　「世間」と障害者家族.....6
2.1.5　閉じる障害者家族.....7
2.1.6　残された選択肢としての施設.....8
2.2　先行研究の批判的検討.....9
3　調査概要.....11
3.1　調査対象者について.....11
4　青年期知的障害者の親の思い.....13
4.1　石川英之さんの語り.....13
4.2　石川美香さんの語り.....17
4.3　原直子さんの語り.....22
4.4　矢野豊さんの語り.....28
4.5　矢野かおりさんの語り.....33
4.6　宮本裕美さんの語り.....38
5　障害者の親であること.....41
5.1　現実を生きる.....41
5.2　他者を意識する親.....42
5.3　家族と外の世界.....45
5.3.1　「世間」から弾かれる.....45
5.3.2　きょうだいの目を通してみる「世間」.....48
5.3.3　埋まらない「世間」との溝.....49
5.4　「施設安心神話」の今.....53
5.5　「親でさえ」の心理.....55
5.6　ひきずられる親性.....57
6　結論.....63
参考文献
謝辞